日本行動計量学会
会報

第7号
1975第10月6日

日本行動計量学会
事務局
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健学科疫学教室内

行動計量学シリーズ刊行をめざして

青山博次郎

昨年度、行動計量学シリーズを学会から発刊することを目的として刊行委員会が作られ、3回に亘って会議がもたれました。現在第一段階として刊行物としてどんなものをとり上げてみるかの目安をつけ、出版社との交渉を始めたところです。

先ず行動計量学とは何か、という問題から委員の方々の意見の一致をみることを試みましたが、これはこの学問が多様性を内蔵しつつ発展生成中であるため甚だ困難であるということで、行動計量学のイメージを規格化することは当面は避けることに致しました。

そうして各人のもつイメージを中心に、これこそ行動計量学たるものと思うものを各人が書いて行くうちにイメージの定着化を図ろうということになりました。

次に内容についての議論では、大きく二つに分け、方法と分野の両方面から問題にとりくんでいくのがよいだろうということになり、方法に関しては計数と計量、分類と弁別、モデル構成、予測、決定、比較指標、パターン認識、シミュレーションなどがあげられました。また分野別としては、公害、世論、教育、健康、行動などがあげられました。

このような枠組を頭において各委員に自分が書くならこんなものをという形でのべていただいたものが次のようなものです。

決定と情報、人物評価、行動の変容、言語と音声、印象形成過程、計量言語学、計量政治学、心理的空間、地域分析、医療システム、計量診断、公害、災害と行動、健康など。

これらはまだ本の表題として生硬なものや、形を成していないものもありますが、出版社との交渉を通じて確定して行きたいと考えています。

始めに述べたように、行動計量学のイメージの規格化がなされていないので、あまりに発散してもどうかということで監修者を設けて大まかな交通整理をすることになりましょう。また適用例、データは必ず入れるように心がけ、説明は研究者のみを対象とせずに丁寧に、かつ直感的なものにする。各巻毎にオーガナイザーを設けて著者が数人で書いてもよいことにするということも意見の一致をみました。

以上がわれわれの委員会で議論してきたことのあらましです。これらの結果をふまえて出版社との交渉に当るのですが、理事長のあっせんで二、三の出版社と交渉を始めているところです。

今年度新しい理事会の発足とともに、再び、刊行委員会をお世話することになりました。出版社との交渉や会計の問題も種々起ってくることでしょうが、会員各位の御支援によって何とか実らせて参りたいと思っています。

御意見などあれば、どしどし御申出下さるよう特にお願い申上げます。

（日本行動計量学会理事・統計数理研究所第三部長）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

林知巳夫氏理事長に再任

総会二日目に開かれた新理事会において、理事長に林知巳夫氏（統計数理研究所長）が前期に引きつづいて再任された。なお、林理事長の任期は、昭和五十二年に開催される第五回総会の終了時までとなる。

第三回総会始末記

瀬谷正敏

第三回日本行動計量学会総会は一九七五年九月八日～十日の三日間、青山学院大学で開催された。三日間を通じて学会総会に参加した学会員の総数は二二八名で、そのうちわけは正会員一五三名、準（学生）会員七五名であった。参加者の所属内訳は大学関係者が、一四七名で（そのうち地方の大学関係者五二名）研究所関係者が、四三名、その他の民間企業団体関係者が三八名であった。

従来の日本行動計量学会は四日間にわたり、同一教室内で学会発表・討論を行うのを原則としていた。これは、学際的研究を目的とする学会の趣旨を実行するために考えられたもので、各学会員が各人の専攻分野にかたまって、他の分野に対する認識や関心をおろそかにするのを避けるためであった。今年度は四日間の学会開催期間では長すぎるという声があって、開催期間を一日短縮し、その分だけ二教室を使って研究発表を並列して行うことを試みた。すなわち、学会開催第二日目の一般講演を方法論と応用の二部門に分けたのである。しかしその結果をみると、参加者にアンバランスが生じ、方法論の部門へ関心が集中して、応用部門（心理・社会学的データと医学データの計量）は同族の者が集って少人数のなれ合い的研究発表会となってしまい、この学会の意図する学際的雰囲気が稀薄となったようである。さらに、第三日目の共通テーマ講演では異なる専門領域の研究者による共通テーマ（予測の問題・SystemとSimulation）を通じての研究発表を期待したのであるが、異なる専門領域における各々の発想や分析の方法などを共通に理解し得るまでにはまだ時間がかかりそうな様子がうかがえたりして、学際的研究の困難さをかい間みる思いがした。また、方法論に人々の興味や関心が集中したことはこの学会の特徴を顕著に示しているといえるが、方法論と応用が、つねに一体となっていなければ意味のあるものが生れないのではないか。この点に関する反省が今後の問題点としてのこされたようである。

また、相対的に発表件数が従来よりも少な目であったが、それなりに発表時間が長く全体にシンポジュウム形式の雰囲気があり、充実した研究発表が行なえ得て有意義であったと思われる。

なお、第一日目は例年のように午前の部を特別講演、午后の部を総会にひきつづき、人間研究と行動計量学Ⅴというテーマのパネルディスカッションがわりあてられた。特別講演は現在話題となっている問題についてその道の専門家に講演を依頼することになっており、今年度は統計的決定理論と人口問題がとりあげられ、盛況であった。パネル・ディスカッションでは異なる専門分野（マーケッティング、政治、法律、心理、工学、医学）を代表する六氏による討論が活発に行われた。このテーマによるパネル・ディスカッションは、この学会のイメージが明確になるまで、比較的長期にわたって行われることになると思うが、学際的研究が今日方々で活発化している現在、日本行動計量学会の果す役割の大きさを痛感した。

（第三回総会実行委員長、青山大学文学部教授）

学会費値上げさる

本学会の年間会費は、これまで正会員二〇〇〇円、準会費一〇〇〇円と他の諸学会に比べて比較的低額であったが、このままでいくと本年は、六〇万円以上の赤字となる見込みである。このような理由で、第一日の総会席上で議事として会費値上げが取り上げられ、承認された。改定された会員は、正会員三〇〇〇円、準会員二〇〇〇円と、これまでより一〇〇〇円づつ値上げされた。

したがって、今年度の会費既納者は、差額（一〇〇〇円）を、未納者は、改定された会費全額を至急納入下さい。

新理事十五名追加承認さる

会報六号でお知らせしたように、正会員による選挙で十五名の理事が選出された。ところが、これらの理事の専門領域のバランスがとれていない為、会則第七条一項を適用して、前記の理事で構成される理事会において、追加理事候補十五名を推薦し、第三回総会の第一日目におこなわれた総会議事にかけたところ、全員承認された。

追加された新理事は次の通りである。

関寛治（東大・東洋文化研）
三宅一郎（同志社大・法）
岩田暁一（慶大・商）
野崎昭弘（山梨大・工）
西田春彦（阪大・文）
三隅二不二（九大・文）
木下富雄（京大・教養）
戸田正直（北大・文）
飯島泰蔵（東工大・工）
南雲仁一（東大・工）
藤田広一（慶大・工）
阿部裕（阪大・医）
大島正光（医療情報システム開発センター）
木村栄一（日医大）
青山博次郎（統数研）

以上

理事担当業務の決定

学会第二日目に開かれた新理事会において、学会活動の各側面を担当する理事の役割について、次のように決定された。なお、（新）とあるのは新任で、他は再任である。

◇編集委員会　林知己夫
◇和文誌担当　野元菊雄
◇欧文誌担当　印東太郎
◇運営委員会　池田央
◇企画委員会　青山博次郎
◇講習会　野崎昭弘（新）　生沢雅夫（新）
◇月例シンポジウム　岩田暁一（新）
◇学会総会　山本俊一（新）
◇会計　柳井晴夫

以上

編集委員会に四氏加わる

これまでの全体編集委員会のメンバーは全員留任とすることが、理事会において了承されたが、新たに次の四氏が編集委員会に加わることになった。

杉浦成昭（広大・総合科学部）
柏木繁男（東洋大・工）
広田安夫（九州歯大）
松村良之（北大・法）

運営委員会に九氏加わる

運営委員会のメンバーは、これまでの委員のうち七名が辞めた他は、すべて留任とし、新たに次の九氏が委員となることが了承された。

猪口孝（上智大・国際関係所）
今井四郎（北大・文）
岡太彬訓（立大・社会）
開原成允（東大・医）
西川泰夫（上智大・文）
繁桝算男（東北大・文）
斎藤堯幸（ユニバック総研）
大隅昇（統数研）
井上通敏（阪大医）

運営委員の役割分担

学会三日目に開かれた新委員を含めての運営委員会において、運営委員会が担当していた業務についての役割分担が次のように決められた。なお、今回の役割分担の決定に関しては、新委員を多く登用するという原則が貫ぬかれている。

◇月例シンポジウム　白崎和夫　岡太彬訓　大隅昇
◇講習会　安本美典　井上通敏　後藤昌司　開原成允　斎藤堯幸　（オブザーバー　丸山久美子）
◇小グループ研究会　江川清
◇行動計量学シリーズ　松原望　小谷津孝明

※　言である。これから、我々がおもむくべき所はどこか？　誰も自明な解答は与えてくれない。すべて学問がそうであるように、結局は、学問は何を研究するかでなく、誰が研究するかで、決ってくる。生半可な「科学」でなく、行動計量学の真骨頂を示したい所…。これから難しい時代に入ってゆく。

（松原　記）

会議議事録要旨

◇理事会（八月十四日）
於 統計数理研究所
出席者 理事九名、監事一名
追加理事候補十五名の決定

◇理事会（九月九日）於青学会館
出席者 理事十四名、監事二名
1. 理事長選挙の結果、林知己夫理事が、前期に引きつづき理事長に就任
2. 理事担当業務の決定（別掲）
3. 新編集委員と運営委員の承認
4. 二年ごとに更新される新理事会は、総会以降結成されるものとし、総会は原則として旧理事会が担当する。
5. 来期の総会会場は東京大学とする。

◇全体編集委員会（九月十日）
於 青学会館
出席者 編集委員八名
1. 和文誌編集幹事会、欧文誌編集幹事会をそれぞれ、和文誌編集委員会、欧文誌編集委員会と改める。
2. 和文誌編集委員会のメンバーに、前田俊郎（専修大・法）山本幹夫（帝京大・医）柏木繁男（東洋大・工）鮑戸弘（東大・新聞研）の四氏を加える。
3. 和文誌、欧文誌編集委員会経過報告

◇運営委員会（九月一日）
於 学士会館分館
出席者 運営委員九名
新運営委員候補九名の決定

◇運営委員会（九月十日）
於 青学会館
出席者 運営委員十六名
1. 理事会報告
2. 運営委員会役割分担（別掲）
3. 次回講習会は、大阪で明年三月くらいまでに開催する、その次は、明年五月頃に東京で開催する。

月例シンポジウム名古屋で開催

第九回月例シンポジウムは、オーガナイザー水野欽司氏（名古屋大・教育）のもとで、「分類」をテーマに十月十八日（土）午後一時～四時半の間に名古屋大学で開催される。名古屋に在住の方のみならず、大阪、東京からも多くの方が参加されることを希望する。

和文誌・欧文誌原稿募集

和文誌「行動計量学」第三巻二号の原稿締切りは十月末日です。いまだに原稿の応募状況は芳しくありませんので、ふるって御応募下さい。応募規定は、「行動計量学」表紙裏に掲載されています。

欧文誌「BEHAVIORMETRIKA」第三号の締切りは明年二月です。まだ、時間的余裕はありますが、投稿を予定される方は、そろそろ準備して下さい。

会員の声

永松 純

最近、他の学会などに出席してみて、計量的研究の方法論が高度のものであるにもかかわらずかなり粗雑に扱われているのではないかと感じることが多い。他方、行動計量学会では、最先端の方法論が厳密に論じられており、大きなギャップを感じざるを得ない。方法論を開発する者とそれを実際に応用する者との二つのタイプがあるとするなら、私は後者に属するだろう。私のような立場の者は少なくないだろうが、より正当な研究を行なおうとするなら方法論をより深く理解していなければならない筈であるが、応用することを目的とする者にとってこのことは難しい。方法論の専門家の批判に対するコンプレックスがあることは事実としても、そのことによる逆の収穫の方が大きくなる筈である。少なくともこのような応用サイドからのアプローチが望めるのは本学会だけであり、そのような場が多くなることを切に希望する。

（立教大学文学研究科心理専攻修士課程）

編集後記

今年は総会は二回続いた総数研を離れて青山学院大学で行われた。まあまあの盛況であった。これで二年前にうぶ声をあげた学会もやっと一人歩きをはじめたということか……。第五号に池田央氏が、「クォ・ヴァディス・ドミネ」（主よ、いずこへいき給う）と、シェンキェヴィッチ（の同名の小説）から引用されたのは、至 ※

≪三頁下段へ続く≫